

氏名	李 旻 河
学位の種類	博士 (美術)
学位記番号	博美第412号
学位授与年月日	平成25年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉現代アートにおける祭儀性 〈作品〉Hesychia

論文等審査委員

(主査)	東京芸術大学	教授 (美術学部)	たほりつこ
(論文第1副査)	〃	〃 (〃)	佐藤道信
(作品第1副査)	〃	名誉教授	高山登
(副査)	〃	教授 (〃)	伊藤俊治

(論文内容の要旨)

本論文は、ある条件のもとでの現代アートにおける祭儀性が、深い「共感(Compathy)」に至る「変化をもたらすきっかけ」になる可能性があるという仮説から出発する。現代アートにおける祭儀性を、内容、行為、空間、体験の要素から先行作品を分析し、実験的な自作での実証により総合的に考察、その意味と役割を明らかにする。一般的に祭儀は、宗教的儀礼や儀式を意味する言葉であるが、本論での「祭儀性」は、「祭祀に参加した人々の行動や言葉、または、時間と空間を精巧に組み立て、共同の目標を目指し、同様に意識が高められる専門的な技術」と定義して用いている。

筆者は、人間性の根源の表現、及び、自身の修行的な表現方法に関心を持ち、制作活動をしてきた。そして同時代の他の作家たちで、同じ関心からそれを芸術表現として昇華させている方法に注目し、彼らの先行作品を研究対象とした。それらの諸要素が、自らの感動の振幅を左右することから、それを「祭儀性」としてまとめることとした。

本論文がとりあげた先行作品は、作家個人の宗教的アイデンティティに捉われず、主に視覚芸術のインスタレーション作品に限定し、具体的には、ビル・ヴィオラ、アン・ハミルトン、オラファー・エリアソンの一部の作品を中心にした。彼ら三者は、互いに共通点は異なるが、共に「祭儀性」を感じさせるからである。

本論文は4章で構成される。

第1章では、研究背景を述べた。第1節では、現代社会と宗教の関係を考察し、その関係性が現代アートに及ぼした影響を明らかにした。現代社会では、既成宗教への不信から、人類の知恵の源泉としての宗教伝統の長点を失ってきた一方で、人間性の回復を願い、作品に霊性が現れてきた傾向を紹介した。第2節では、宗教学における祭儀の概念と構成要素を探り、現代アートにおける祭儀性を分析するための枠組を整えた。また祭儀に代表される宗教伝統が、私たちの生にどれほど深く関与しているのかを論証し、様々な宗教儀礼から事例を紹介した。

第2章と第3章は、現代アートにおける祭儀性を、大きく「儀式と行為」「空間と体験」に分け、ヴィオラ、ハミルトン、エリアソンの作品の中から実例を挙げて論じた。

第2章の1節では、作品の内容が直接、祭儀を連想させるものについて、まずヴィオラの作品が、火と水により人体を消滅させ、自然との合一を求める自然崇拝を思わせることを論じた。次にハミルトンの作品について、家事労働によって日常を祭儀化する方法と、聖餐式を連想させることを論証した。第2節「概念的パフォーマンス」では、ハミルトンとヴィオラの作品でのパフォーマンスと、典礼劇から

派生した活人画との関連性について述べた。彼らのパフォーマンスは、アニミズム的で即興性の強いものとは異なり、洗練された行為の反復による新たなパフォーマンス形式といえる。

第3章の1節では、観客側の体験に着目し、現代アートが試みた3種の空間演出方法について分析した。その方法とは、映像インスタレーションによる仮想空間、観客とパフォーマーとの大掛かりなインスタレーションによる演劇的な舞台空間、物質性を最大限排除した知覚体験のための空間演出などである。第2節では、観客の作品体験が、個人的に成り立つハミルトンの作品での体験と、集団的なエリアソンの作品での体験とに分けて対比した。ハミルトンの作品は、パフォーマーの反復的行為に導かれた観客が、それが「自分だけのために行われている」ように感じさせる点で、集団で行われるが、個別に享受しなければならない祭儀の特殊性を表している。エリアソンの作品では、逆に集団的鑑賞から共感が生まれ、他者との距離が短くなることで、共同体的体験の可能性を持つことを指摘した。

第4章は、筆者の造形方法について、前章で論じた祭儀性を軸に、自らの作品での実践をまとめた。第1節では、筆者の作品に共通している要素、祈り、文字、言語、修行性、嗅覚、革について分析した。第2節では、体験のための空間演出を、嗅覚を取り入れたリアル・タイムのインスタレーション作品と、修行性を強調した映像インスタレーションの試みとに分けて論述した。

このように、現代アートの先行作品や自作の実践への考察を通じて、内容、行為、空間、体験の要素から、現代アートにおける「祭儀性」とその可能性について論述した。「祭儀性」の研究により、祭儀を通して私たちの生が芸術へと変わる過程の本質と、その意味について思索できることが明らかとなった。祭儀は、「芸術家-芸術作品-観客」という区分け以前のそれらが混合した状態であり、主導者と参加者が存在しながらも、参加者も何らかの行為を通じて積極的に体験するという事実が重要になる。つまり祭儀とは、「忘却」を抱いて生きていく存在である私たちに、人間性の根本の「聖なる感覚」を、周期的に繰り返し体験させるために整えられてきた努力の結晶体とも言える。したがって、現代アートに現れる祭儀性は、人間性の根本の感覚に立ち返り、祭儀の目的である「共感Compathy」への「変化をもたらすきっかけ」となることを指摘した。

(博士論文審査結果の要旨)

筆者は自らの制作方法が修行的であることに関心があったという。本論文は、根源的な霊性の表現のために現代アート（自らの制作）に祭儀性を持ちこもうとする筆者の試みを論じたものである。そもそも芸術自体、宗教から派生してきた歴史をもつため、現代アートにおいて宗教に抛らない祭儀性で霊性という根源回帰を図ろうとする試みは容易ではない。そのため本論文は、どのようにすればそれが可能なのか、隣接諸分野の豊富な文献渉猟と現代アートでの実践事例の検証から、その方法論の枠組を構築することに労力を割いたレベルの高い論考となっている。

第1章ではまず祭儀の構成要因としての「場所」「行為」「共同体」について確認し、第2章で現代アートで筆者のイメージに近い祭儀性を実践するビル・ヴィオラ、アン・ハミルトン、オラファー・エリアソンの作品を検証する。とくに即興的パフォーマンスとは異なる「概念的パフォーマンス」として、“反復の行為”の重要性を確認する。さらに第3章ではそれを実際の空間演出として、映像の使用、演劇的舞台空間の設定、知覚体験を操作する空間演出の方法を分析。とくに作品と観客が一体となる空間演出に、祭儀性演出の有効性を見出す。そして第4章で自身の作品について解説している。

筆者自身の作品は、公開制作（観客との一体化）、写経に擬した修行的な反復行為、その文字を牛革に焼きごてで焼き刻んでいく嗅覚の刺激、映像インスタレーションの併用など、前章までで検証した有効要因を総合したものになっている。素材選定や映像の使用には、牛肉のBSE問題やアラブの春など、様々な時事的要因も反映されているらしい。提出作品は「Hesychia」（ヘシユキユア）という「内的平安」を意味するギリシャ語を作品タイトルとしている。

筆者が最も重視しているのは、祭儀性の導入による「作者・作品・観客」の一体化と共同体験、それによる「霊性」への回帰と「共感」の回復である。実際の展示では、火気、臭気の禁止、音の制限といった美術館使用の制約から、思い通りの展示ができなかったようだが、それは逆に近代に宗教と切り離されることで視覚に特化した「美の神殿」として成立した、美術館という場の属性を浮き立たせることにもなった。また現代芸術と宗教の関係について、「西欧での芸術と宗教の克服しづらい関係」「宗教に対して賢明に話しながら、同時に賢いマナーで芸術を扱うことは不可能」(エルキンス)といった、東西での似て非なる状況など、各所に多くの重要な指摘も行なわれている。

欧文文献も広く読解した本論文は、学術的論考、創作に関する論考が相互参照的に高いレベルで展開されており、論述内容の深度、強度ともに高い。優れた学位論文として審査会の高い評価と承認を得た。

(作品審査結果の要旨)

イ・ミンハの作品「Hesychia(ヘシユキユア)」は、映像インスタレーションによる作品である。具体的には全面を黒い布で覆い非日常的な広い(13m×4.6mの広さ、高さ4m)ブラック・ルームとして演出されている。入り口から入ると、明るい部屋から深い暗い空間に放りだされ、奥行きは感知できない深さである。足下は柔らかい感触を持っており、外の床とは違った触感体験をしながら、闇の空間を目が泳ぎ、かなり奥の方に感じる明るさの方に向かって歩き出すと一頭の牛を半分に切ったと思われる牛皮幕に仕切られた狭い空間に導かれる。その円環状に吊るされた牛皮の内側に立つと牛側の表面には焼きごてで刻まれた各国言語・宗教の文字が所狭しに描かれている。世界の写経文字の群れが見る側の想像力を揺り動かし目眩を喚起する。より光の方へ体向けると、正面には高さ4m大の透明な豚皮に何かが映っている、蠢いている映像を観る。映像は絶えず何かを書く修行していると思われる焼きごての手の動きが映し出されている。そして、皮が焼ける時に出る煙がたなびいている。その映像に見とれ、目を近づけて行くと透明な繋ぎ合わされた豚の皮の表面、すなわち毛穴の細部に目が届く。これは10枚半の豚皮を特殊透明加工し繋ぎ合わせたものである。この写経的儀式空間を五感に響かせ、そして又闇に戻され、これは何だろうと思ひ巡らせながら言い知れぬ世界体験を跡に日常の世界に帰還するのである。

イ・ミンハの作品は論文に観られるように「類似儀礼的行動により、創出された聖なるものは、神聖に対する宗教的主張ではないにも拘らず、他のものとは違う特別な資質になることで、重要な何かを表し、特別な意味だけではなく、感情でぎっしり埋まったイメージと経験を呼び起こすことになる。(キャサリン・ベル)」を想起させ、現代アートにおける祭儀性、及び藝術の起源へと誘う行為を通して人間らしさを共感できるであろう可能性への問いかけとして優れている。イ・ミンハは共感のレベルの中での高次元の情緒的同一視を求めているが、其の可能性を秘めながらも見る側の身体的共振を促す空間的及び時間的シミュレーションを作品空間全体に見えない五感+六感の往復運動、更に力学としての波動を再分析視、視覚化、身体感覚化を一層強化する必要がある一つの方法としてあるのではないかと感ずる。美術表現として非常に困難であり、未分化な超越する問題に挑戦する意識は賞賛に値する。

したがって、博士課程に相応しい優秀な作品と認め、全員一致で合格とした。

(総合審査結果の要旨)

本申請者は、論文において、根源的な霊性にふれる現代アートの特質を「祭儀性」と位置づけ、どのようにすれば祭儀性が可能となるか(方法論の枠組み)、そして、祭儀性の導入によって何を可能とするか(目的と機能)、を同時に論じている。申請者の実験的な自作をふくめ、申請者が最も重視しているのは、祭儀性の導入による「作者・作品・観客」の一体化と共同体験、それによる「霊性」への回帰と「共

感」である。論文第一副査佐藤道信先生が指摘されるように『現代アートにおいて宗教に拠らない祭儀性で霊性という根源回帰を図ろうとする試みは容易ではない。』 また、「祭儀性」を論じること自体がもたらす多くの誤解を回避するために細心の注意をはらい、『隣接諸分野の豊富な文献渉猟と現代アートでの実践事例の検証から、その方法論の枠組を構築することに労力を割いたレベルの高い論考』である。

本申請者の論文の重要性は、未来への希望につながることを予感させることである。政治・経済が混乱し、ドグマとして宗教が存在するように語られる現代世界において、難易度の高いテーマに果敢に取り組み、実践者ならではの芸術実践をめぐる重要な指摘をおこなったことである。また、その新規性は、実践者の論文において、明晰に隣接諸分野から引用しつつも、ある分野の言説から想定される固定的なイメージや発想から自由な議論の地平を設定したことである。そのことにより、つねに新たな何かになりつつある芸術表現と実践者による言説のダイナミズムを保つ可能性を獲得したことである。

本申請者の作品は、「Hesychia」（ヘシュキユア）という「内的平安」を意味するギリシャ語を作品タイトルとした映像インスタレーションによる作品である。天井の高い大学美術館のギャラリーの一角に、非日常的な暗闇をもつブラックルームをつくり、論文で語られた“反復の行為”による「概念的パフォーマンス」のプロセスを示す映像と結果の痕跡を組み合わせ全体空間を統合している。表現円環状に吊るされた牛皮には、“反復の行為”の痕跡として、焼きごてで刻まれた格闘言語・宗教の文字が所狭しに描かれている。中央には透明な豚皮に焼きごての手の動きが映し出され“反復の行為”を暗示的に示され、そして、皮が焼ける時に出る煙がたなびいている。繋ぎ合わされた透明な豚皮の表面には毛穴の細部が不思議な質感をつたえ、写経的儀式空間を五感に響かせ、論文で分析した空間演出として、映像の使用、演劇的舞台空間の設定、知覚体験を操作する空間演出の方法を作品のなかに統合した体験となっている。作品第1副査高山登先生のご指摘のとおり、現代アートにおける祭儀性、及び人間らしさを共感できるであろう可能性への問いかけとして優れており、非常に困難であり、未分化な超越する問題に挑戦する意識は賞賛に値する。今後の展開への課題も含め、高いレベルに達していると認められた。

論文、作品ともに博士課程に相応しい高いレベルにあると認め、全員一致で合格とした。